

「方法」講義立会記

匿名希望

「方法」とは、前半は美術家である中ザワヒデキと詩人の松井茂、音楽家の足立智美が、後半は同じく中ザワと松井、加えて作曲家の三輪眞弘が構成する、2000年から2004年までを活動期間とした一種の総合芸術運動である。方法主義は外国人向けには **methodicism** と訳された。方法主義を立ち上げる要因を、中ザワは「歴史法則主義の立場から、美術史と文学史と音楽史を、個別にではなくひとつの歴史として語るというアイデアである。」と述べている。中ザワは、「多様性と反モダニズムを特徴とする現在に対して、『アンチ』の姿勢であった。」絵画、詩、音楽を芸術という大きな枠でとらえることを主張した。

方法主義の中心的主張として中ザワ自身の講義で繰り返されていた事柄としては、芸術を材料ではなく方法で表現するという考えである。具体的には音楽を音符ではなく文字で表現したり、絵画を筆ではなく文字で表現するなどである。

2000年1月1日のことである。起草者である中ザワによって、年賀状やメールで方法主義第一宣言がなされた。最初の方法主義宣言で中ザワが最も言いたかったことは三つのジャンル「方法絵画」「方法詩」「方法音楽」の命名と並置である。「ロマン主義的アイロニーが立ち現れるという批判がおこなわれるとしても、敢えてその批判は重要ではないという観点から、快樂否定のポーズを採ろうとした。」これが中ザワの考える第一宣言の骨子だった。その後足立の提案により機関誌「方法」の発行が始まった。

2001年1月1日、起草者を足立として方法主義第二宣言がおこなわれた。年賀状の記述の「方法主義（第一）宣言と同様、起草立会者は必ずしも賛同者とは限らない。」という箇所にある通り、起草者の意見とその他のメンバーの意見が一致していない点もあったという。

2002年1月1日、起草者を中ザワ、松井として方法主義第三宣言がなされる。2004年夏ごろ、「方法」は、新たな肉体によって方法主義的な芸術作品を実現する集団である方法マシンを立ち上げた。ちょうどそのころ、中ザワは自らの作風を転換するかどうか悩んでいて、「方法」の幕引きについてもそのころに松井と語っていたという。中ザワの「転向」については敢えてここでは触れないことにしよう。

2004年12月31日刊行「方法 第四二号 最終号」にて、起草者足立により方法主義第四宣言が発表される。松井は方法主義と方法詩を現在進行形とし、三輪は方法音楽を未来形で語ることにより、方法主義の継続性をアピールした。方法マシンの始動によって機関誌の必要性が無くなったとはいえ、方法主義がこの先どのような道筋をたどっていくのか実に興味深い。